

あれから7年③

聞き続け、伝え続ける 第二の双葉町をつくらないために

ドキュメンタリー作家 堀切さとみ



2011年3月11日。経験したこ
このない揺れと津波の映像、そして
福島第一原発の異常事態。

ついに起こってしまった…私は、
不安と憤りでいっぱいだった。テレ
ビが「ただちに影響はありません」
と言った。原発周辺に住む人々に、
ちゃんとした情報が伝わってほ
しい」と願っていた。

私の住む埼玉に、原発周辺の町か
ら多くの人が避難してきたのは一週
間後のこと。中でも双葉町は、埼玉
県北部にある廃校(旧騎西高校)に
町役場を移し、集団で避難生活を
送った。放射能のリスクから少しで
も町民を遠ざけようと、井戸川双葉
町長(当時)が決断したのだ。
私はそんな双葉町に一縷の希望を
感じた。あれから7年になる。

全て置き去りにして避難

4月。騎西高校では、双葉町民の
2割に当たる1400人が暮らし始
めていた。毎食弁当が支給され、ボ
ランティアや有名人によるイベント
が行なわれる日々。でも、仕事を失
い、行く先のみえない人たちが何を
思うのか。テレビの報道だけではう
かがい知ることができないと感じた
私は、カメラを回してこの人たち
を記録したいと思った。家は残って
いるのに放射能のせいで帰れない。
何十年もかけて積み上げたものを、
そっくり置き去りにしてきたのだ。

「こんなところにじっとしている
くらいなら、三陸沖に行つて瓦礫の
撤去の手伝いをしたい」という人が
いた。そんな中、カフェや書道教室
を開いたり、ふるさとの盆踊りを再
現したりと、懸命に双葉町での日常
を取り戻そうとする町民たちがあら
われた。情報を集め放射能の勉強会
をする人も。フライバシーのない生
活だったが、肉親を亡くしたり老々



騎西高校の駐輪場が物干し場に

介護が必要な人たちにとって、ここ
は大切な場所になっていた。

しかし、いつまでこの避難生活が
続くのか。騎西高校は給食調理の設
備があるのに、一次避難所であるが
ゆえに避難者が調理することはでき
ない。福島県内の仮設に避難してい
る町民からは「いつまでタダで弁当
もらつてんだ。恥ずかしい」と苦情
が出てきた。

悲しすぎる分断

国と福島県は「年間20ミリシーベル
トなら大丈夫」と除染に力を入れ、
帰還政策を進める一方で、双葉町と
大熊町に中間貯蔵施設を作ること
を検討していた。

双葉町に一時帰宅した人は、荒れ
果てた町と我が家を見て絶望してい
く。「双葉に戻れないなら、せめて
福島県で暮らしたい」と、埼玉から
福島に戻る人も増えた。「なぜ役場
を福島県の外に移したのか」と、町
長への不満をあらわにする声も強
なっていた。

「町民を被ばくから守りたい」と
言った井戸川町長は2013年2月
辞任に追い込まれ、その年の12月に

は騎西高校も閉鎖になった。怒りの
矛先が国や東電ではなく、最も近
い人たちに向かってしまったのだ。

話を聞き続ける

避難所がなくなった後も、私は話
を聞き続けた。双葉町で牛飼いをし
ていたある女性は、埼玉に避難した
直後から、畑と納屋を借りて農業を
始めていた。

地元の人からは「いつまで避難し
てるんだ」「賠償金もらっているの
に働くことないでしょう」と言われ
たりする。そのたび彼女は「なにく
そ」と思う。双葉町に残した牛は殺
処分され、支えあつた夫も避難中
に亡くなった。それでも「殺されて
いった牛たちの分まで、どんなに
辛いことがあつても生きるんだ」と
笑う。人は生きがいを失つては生き
ていけない。彼女は早い段階で見つ
けたが、そんな人たちがばかりでは
ない。避難先で自立して生きるのは、
並大抵のことではないと思う。

原発避難者たちは、7年たった今
も国や県に翻弄され続けている。事
故前の何十倍もの放射能がある場所
に人々を帰還させ、何事もなかった
かのように原発再稼働が進められて
いる。こんな「復興」を、誰が想像
したのだろうか。「第二の双葉町を作
らないでほしい」という避難者の声
に耳を傾けることは、今からでも決
して遅くはないはずだ。

堀切さんの映像作品の上映予定や
DVD等については下記を参照

■原発の町を追われて 公式サイト
<http://genpatufutaba.com/>